

## 奈良女子大学記念館

藤田 盟児

生活環境学部 住環境学科 教授

奈良女子大学は、明治41年（1908）に設置された奈良女子高等師範学校が前身であり、その本館として翌年に完成した建物が記念館である。昭和24年に国立奈良女子大学に改組されてからも大学の本部と講堂として使われていたが、昭和50年代に本部と講堂が別の場所に建てられたので、平成2年から記念館とされ、平成6年には記念館と同時に建てられた守衛室と正門とともに国の重要文化財に指定された。平成26年から耐震改修工事を受けて、現在も2階の講堂は大学院生の修了式等で使われており、明治末期の高等教育機関の雰囲気や大学構内に漂わせている。

木造の総2階建てで、寄棟造という洋風を感じさせる屋根形とし、棟の中央に頂塔（ランタン）を設けて、明かり取り窓（ドーマー窓）も正面と背面に2箇所ずつ、側面に1箇所ずつ計6箇所設けて屋根裏に外光を取り入れている。ランタンは鐘などを取り付けた跡がなく意匠的なものと思われる。正面に玄関ポーチをつけるが、その上部を三角形のペディメントとして西洋館らしい外観としている。

外壁には、まだ照明設備が十分でなかった時代の建物らしく室内奥まで自然光を取り入れるための縦長の上げ下げ窓を多く設置し、2階の腰壁までを縦張りと横張りの板壁を交互に使って変化を与え、白壁部分はハーフティンバーと呼ばれるヨーロッパ北部の民家に見られる筋交いを入れた真壁構造とする。筋交いとは、柱や梁でできた四角形の枠組みの変形を止めるために入れられる斜材のことで、記念館のようにペディメント部分のクリスマスツリーのような曲線材や、2階の窓の上部にある丸と十字を組み合わせた材、1・2階境の波形曲線と直線をX字形に組み合わせた材は、筋交いを装飾的にデザインしたもので、木材資源が豊かで狭い城壁内に高密度な木造建築を作った北部ヨーロッパに特徴的な民家様式である。木部は淡い青緑色（または青磁色）で塗装され、白い壁と灰色の瓦屋根のコントラストが、清潔感と活気ある高等教育機関にふさわしい雰囲気をつくっている。

正面に付けられた玄関ポーチは、石製の基壇にダブルコラムと呼ばれる2本の柱をペアで用いる形式を採用し、軒先は持ち送りと呼ばれる曲線模様のついた支持材を並べて支えるなど、石造のバロック様式を木造に翻訳したデザインになっているのは格式を演出するためである。石階段を上って四葉型の模様や透し彫りを入れた板壁と欄間で囲われた玄関に入ると、十字型につくられた中廊下をはさんで大小7室の部屋が並ぶ。それらは、竣工

当時、受付、庶務と会計の事務室、校長室、応接室、宿直室、食堂兼会議室などに使われており、本館の脇に増築されている平屋部は事務局長室であった。

廊下の交差部では、縁取りされた柱型の上に柱頭に相当する大きな持ち送りが置かれて梁を支えて中心性を表現し、廊下の腰板や扉、天井板などは淡いモスグリーンに塗装して、白い壁面に合わせている。腰板やドアの各所にみられる四葉型の模様は、記念館の基本モチーフである。

一階の両端にある階段を昇ると、2階は中央が広い講堂となっており、その前後はホールになっている。階段の手すりは、古典様式の柱型を模して彫られた親柱と、束や手摺りがつくる長方形や平行四辺形の中に筋交いを菱形に入れて、四隅にできる三角形部分に三葉型の透かし彫りを入れる。親柱のアーキトレイブにあたる帯には四葉型の模様が入る。

講堂内には、奈良高等師範学校の開校当時から使用されている長椅子が並び、正面にはギリシャ神殿を模した板羽目造作が置かれて正面性を演出しているが、よく見ると背後のコリント式の柱を隠しているのが後付けだと考えられる。壁の上部を巡る簡易的なエンタブラチュアをコリント式の柱が支えていることから、元々の内装はギリシャの古典様式をベースにした白い内装でまとめられていたと考えられる。その脇に置かれた「百年ピアノ」は、奈良女子高等師範学校の創立当時に購入されて、戦後は倉庫に眠っていたものを平成17年に発見して修復したもので、譜面台の装飾などは記念館の照明器具などの意匠と類似し、創立当初の時代性を示している。

講堂内部の空間的見所は、屋根構造をトラス構造として幅約16mの広い空間を中間の柱無しで支えているのに、天井を平板にしないために中央部を約2mほど折り上げて、ゆったりとした高さを演出している点である。そのために屋根を支える三角形のトラス構造の底辺にあたる下弦梁が、折り上げ天井の下端を水平に4本走るが、細い格子で華奢な感じの折り上げ格天井部分に対して、ほどよい力強さを加えて空間に緊張感を与えている。

天井の折り上げ部には半円型の窓が並べられ、屋根に乗るドーマー窓から排気する役目を果たし、折り上げ天井の中央につり下げられた華奢なシャンデリアの取り付け部にある雪の結晶型に組まれた枠組の中に開けられた花模様の透かし彫りとともに換気口の役目を果たしている点も、近代的な衛生思想が導入され始めた明治末期の学校建築の考え方を示している。

照明器具の吊り元にある花模様の透し彫りの換気口や、ドアや腰板に貼り付けられた四葉型、あるいは三角形になる場所につけられた三葉型の飾り板や透し彫りは、玄関から1階の各室と廊下、2階への階段やホール、講堂まで、さまざまな場所で少しずつ変形しながらリフレインされる、記念館の雰囲気をつくる基本的なモチーフであるが、こうした

モチーフに共通する特色は、もともとは花や葉、雪の結晶のような自然の中にある有機的な形態から生まれた模様が、すこし幾何学的で直線的に変形している点である。

こうした装飾の性質を理解するためには、記念館が建てられた 1900 年頃に欧米で起っていたデザイン上の大きな転換について知っていなければならない。19 世紀終わりのヨーロッパでは、1868 年の明治維新で開国した日本からもたらされた美術工芸品に刺激され、ジャポニズム（日本趣味）という趣味が流行していた。産業革命後の市民社会の中で新たな芸術表現を求めている西洋の芸術家は、葛飾北斎を始めとする日本の芸術家の自然描写や自由な構図に衝撃を受け、それまでの堅苦しい西洋美術の伝統から離れて、自由で有機的な造形原理に転換した。そうして花開いた造形芸術をアールヌーヴォーとか世紀末美術と呼ぶ。また、印象派美術が生まれたのもジャポニズムのためであった。しかし、そうして世紀末のヨーロッパに広がった有機的で自然な形態にしたがう曲線を使った装飾は、1900 年頃を境にして工業化する社会に対応した直線的で幾何学的な模様へと変わっていく。この幾何学化した装飾をアールデコ様式と呼ぶが、記念館の装飾モチーフにみられる性質は、アールデコ趣味の芽生えを体現しており、印刷技術の発達で新聞や雑誌というマスコミを通じてデザインや技術が世界同時に進むグローバル化時代の到来を物語る。つまり、現代になって一層進むグローバル化は、記念館が建設された頃から始まったのである。